

八〇歳近いいまも映画好き。

その原点は

戦後の蒲田映画街にはじまる

高橋 明紀代

○娯楽は、ラジオから映画に拡がった

いまから約六〇年以上昔、たいへん活況を呈していた蒲田映画街とそこで観た邦画は、いまも映画やコンサート好きの私の原点の一部を形成している。

しかし、それ以前、娯楽の中心はラジオ放送であった。ラジオではニュースの他に、相撲や野球、寄席の中継、浪曲、講談、ドラマ、歌謡番組などいろいろな娯楽番組を送っていた。子ども向け番組もあったが、当時ラジオは一家に一台なので、子どもたちは大人向けの番組を自然に聞いていた。

私が印象深かったラジオ番組の一つに「たずね人の時間」がある。これは、終戦を迎えて、中国東北部（満州）や朝鮮半島、南方から未だ帰還しない父や兄、あるいは国内で別れたままの家族の消息をたずねる番組で、毎夕放送された。イントロの音楽が流れ、番組のはじまると、私はなぜかちよつと緊張しながら聞いていた。

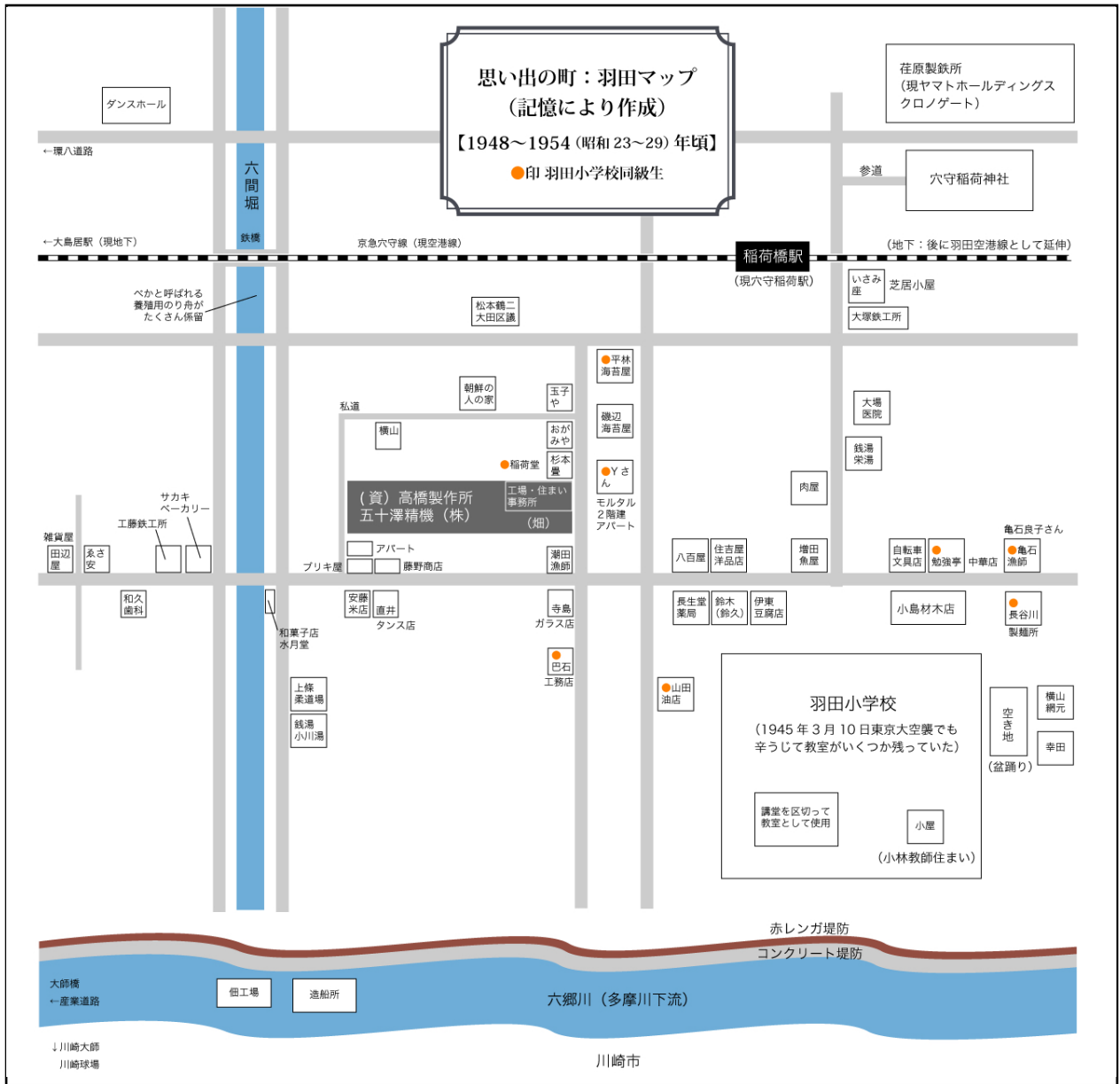
○美空ひばり好きのお手伝いさんが私を映画に導いた

わが家には一八歳くらいの熱狂的な美空ひばりファンのお手伝いさんがいて、私は彼女に連れられて初めて映画を観に行った。記憶をたどると、私が最初に映画と出会ったのは一〇歳（一九五一（昭和二六）年）の頃だ。私が混雑した満員の蒲田松竹で観た映画は、美空ひばりとハンサムな岡田英次が共演した「泣きぬれた人形」（一九五一年松竹）だと思う。

ストーリーは兄の岡田英次はひばりと貧しいアパートの二人暮らしで、兄は妹が卒業式・謝恩会で唄を披露するので、セーラー服を買ってくれる。

ところが、卒業式の前日、兄の友だちがアパートに泊まるのだが、その友だちがセーラー服を盗んでドロコンしてしまう。結局、ひばりは謝恩会で穴の開いたセータ姿でスコットランド民謡「庭の千草」を歌い、参列する父兄の涙を誘うシーンで終わった。

休日に私とお手伝いさんは母の許可をもらい、わくわくしながら、当時単線であった穴守線（現京急空港線）の稲荷橋駅で乗り京浜蒲田駅（当時）で下車し、飲み屋街の呑んべ横丁（現アスト商店街）を急いで通り抜け、蒲田映画街に向った。昼間の呑んべ横丁は寂れた感じで、私にちよつと怖い感じがした。わが家は羽田・六軒堀の傍で父が工場



経営をしていて、稲荷橋駅へは約五分の距離にあったのだ。

続いて、ひばりと人気の高かった鶴田浩二が共演した「あの丘越えて」や嵐勘十郎と共演した「鞍馬天狗・角兵衛獅子」(二作品とも松竹一九五一年)を観た。ひばり映画には、必ずひばりが歌うシーンが入っていた。これは、既に人気が高かった、歌手ひばりのファンを映画にも動員することが狙いだったのであろう。こうして私はお手伝いさんに導かれて映画好きになっていった。

さらに、ひばりの「りんご園の少女」(一九五二年松竹)を観た。この作品でひばりが歌った「りんご追分」は、コロンビア・レコードから発売され、B面だが大ヒットし、後々ひばりの代表曲のひとつとなる。

やがて、ひばりはアメリカの人気子役のマーガレット・オブライエンと「二人の瞳」(昭和二七(一九五二年大映))に共演している。マーガレット・オブライエンがこの映画出演のため羽田空港に到着すると聞いた私は、彼女をひと目見たいと、勇んで空港に行った。カメラのフラッシュを浴びながら現れた金髪で色白のにこやかなマーガレットは、私が初めて見た白人美少女であった。

○ラジオで人気の「笛吹き童子」や「君の名は」などの映画も、見逃さず

やがて歌舞伎の若手だった中村錦之助（後に萬屋錦之助）が映画界入りし、人気が出てきたからだろう。以降、錦之助主演の作品を蒲田東映で観るようになる。最初はラジオの人気番組の映画化で、錦之助主演の「笛吹き童子 新諸国物語」を観ている。（昭和二八（一九五三）年東映。同じラジオ番組「紅孔雀」の映画化では、錦之助は東千代之介と競演し人気を二分していた。二つの作品は、すでにラジオで、福田蘭童の笛をベースとする斬新な演奏が映画にも起用され、ファンを魅了した。

他にラジオ人気番組の映画化では「君の名は」（菊田一夫作）がある。お手伝いさんと人気が高い「君の名は」（岸恵子・佐田啓二主演 一九五三（昭和二八）年松竹）を観ようと、勇んで蒲田松竹に出かけたが、超満員で並んでも入れない。

その後お手伝いさんが蓮沼の映画館で上映されるといふ情報聞いて来たので、二人でさっそく足を運んだ。京浜蒲田駅から蓮沼まではけっこう距離があったが、なんとかどり着いて観ることが出来た。

よく知られるように、「君の名は」はラジオ放送で人気が沸騰して、放送時間の銭湯の女湯はがら空きになるといわれた。お手伝いさんは、映画を観てかなり感激していたが、私は話題の映画を観に行ったということで納得していたように思う。

### ○羽田の見世物小屋「いさみ座」と父と行った浅草国際劇場

実は、社会人になってから、私が映画好きになった下地として、蒲田映画街に行く前の小学一、二年の頃、地元羽田の芝居小屋「いさみ座」に通ったことや、父の娯楽好きが大きかったと気づいた。

父の町工場には住み込みの従業員が一〇人ほどいた。母はお手伝いさんと共に彼らの三度三度の食事作りをし、空いた時間では工場事務を執るなどとても忙しかった。

当時はまだ工場向け給食配達やコンビニなどがなかった時代である。同時に、わが家には長女の私の下に妹と弟二人がいて、それぞれが年子か二才違いだから、母は育児も気が抜けなかった。したがって、休日に母が私を映画に連れて行く余裕はとてなかつたのである。

父は工場で従業員の先頭にたつて、朝六時から夕方六時まで働く毎日であったが、テレビが登場する以前、父の数少ない楽しみは、浅草国際劇場に出かけて、淡谷のり子、二葉章子、渡辺はま子のショーを観に行くことであった。その時、必ず小学生の私を同伴して出かけた。

父は、若い頃、戦前の盛り場のひとつ浅草によく行って来たようで、終戦後に被災した浅草がどう復興したか知っていたのだろう。父は私の目の前で、浅草国際劇場前のダフ屋からチケットを買っていた。この時私はダフ屋とい

う商売があることを知った。

私は国際劇場の舞台の派手な演出に目を奪われた。淡谷のり子らが歌う唄はラジオで馴染みがあったので、もっぱら、きらびやかな舞台で熱演する淡谷のり子たちにみとれていた。

浅草寺は戦争で焼け、本堂への階段はベニヤ板づくりであった。ショー終了後九時くらいだったろう。夜静かになった仲見世店通り商店街を、父と歩いたのをハッキリ覚えている。

一方、「いさみ座」はどき回り興業が行われていた小さな小屋であった。夜になると私は、この小屋にひとりで入りするようになった。ここでは国定忠治や清水次郎長の芝居が演じられた。その他浪曲、講談、女芸人による水芸、サーカスなどのありとあらゆる演し物の公演があった。

私はこれらの演し物や芸人たちの様子がよく分かる舞台の傍から熱心に観入っていた。夜の小屋には、地元の漁師や砂利を運ぶ男、海苔屋で働く男、町工場の職人などが大勢来ていた。満員の客席から、彼らが鼻根の役者や浪曲師に「よう、待ってました」と声をかける風景が私にはとても珍しかった。いま考えると不思議だが、当時子どもの私がひとりで出かけても、危険な目に遭わなかったのだ。

## ○中学で、友人と封切りの洋画ファンになる

田園調布の私立の中学校に入ると、私の映画好きはいつそう強くなった。学校の図書室に映画雑誌「映画の友」があり、熱心に読みふけた。また、わが家では、野球や相撲好きの父が「報知新聞」を購読していた。私はその娛樂面をくまなく読むようになった。雑誌や新聞には、人気スターの動向や、封切り近い映画が紹介されていた。私はそれらの記事を読み耽り、いっぱいしの映画通になったつもりだった。

やがて、映画好きのクラスメートと都心の封切り館に洋画を観に行くようになった。校則では禁止されていたが、二人だけで築地松竹や日比谷映画でヒッコック作品の「裏窓」や「鳥」、「情婦」を観て、その面白さに感動した。他にオードリ・ヘップバーンの「ローマの休日」やジェームズ・ディーンの「エデンの東」「理由なき反抗」、エリザベス・テーラーの「ジャイアンツ」「熱いトタン屋根の猫」など、「報知新聞」や「映画の友」の映画評を読んで、クラスメートと次々に出かけていくようになった。

しばらくして、高校生の期末試験の終了日の帰り、寝不足気味だったにもかかわらず、アンジェイ・ワイダ監督の「灰とダイヤモンド」と「地下水道」の二本立てを観て、第二次大戦前後のポーランドの悲惨な歴史に圧倒された。

やがて、社会人の二十代はじめ、私は以前からどうしても観たいと思っていた一九五〇年代のイタリアン・ネオリ

アリズムの作品が都心の名画座で連続上映されると聞いて、「鉄道員」「自転車泥棒」「道」「太陽はひとりぼっち」「ひまわり」などをはしから観て、また洋画の新しい魅力を味わった。

### ○八十歳近いいまも、劇場映画を楽しむ

七〇代になり、日経新聞に掲載された「蒲田モダン研究会」（鍋谷孝さんの記事）を知って、新聞社に問い合わせをして参加するようになった。そこで、小津安二郎作品をテーマとした会合に出席した。それが刺激となって、数年前の正月、小津作品を「TSUTAYA」から五本借りて来て集中して観る機会があった。

その結果、松竹で助監督をし、後にテレビで活躍する山田太一のいくつかの作品に、小津作品からの強い影響を感じることがあった。こういう点も、映画が持つ豊かな可能性だと思っている。

いま振り返ると、一〇歳の頃から親しんだ数々の邦画も洋画も実に魅力に富んでいたと思う。それらの作品で、監督や脚本家は自分の表現方法やスタイルを駆使して、ていねいに作っていた。作品はそれぞれ斬新で力強く、登場するスターは魅力たっぷりの演技でかっこうよく、一〇代であった私をぐいぐい引き込む力を持っていた。

数多くの映画を観てき私は、八〇歳近いいまも、NET FILIXやDVDよりも、ひとりで劇場に出かけて行き映画を楽しむほうが性ににあっている。

資料… 幸田順平氏提供 「東京都大田区 世田谷区と品川区目黒区大森区 映画上映劇場リスト」



現在の蒲田東口（かつての蒲田映画街）